

日本の福音主義神学の課題と方向性を探って―市川氏の基調講演に対する一つの応答

(日本福音主義神学会西部部会秋季研究会議応答講演)

2013年11月18日

於 関西聖書学院

担当 横田法路

(関西聖書神学校講師)

日本福音主義神学会は、その設立より40年以上が立ち、次世代へのバトンタッチが真剣に考慮されているという。そのために、福音主義神学の基盤を確認すること、さらに今後の方向性を探ることが、今回の研究会のテーマであると理解している。筆者は、市川康則氏の基調講演要旨（「福音主義神学の基盤を点検する―今後の営みに向けて―」）に触発されながら、この問題について自分なりの考えを述べさせていただくことで、基調講演に対する応答の責任を果たさせていただきたいと思う。

1 福音主義神学の目的―教会の健全な成長と発展に奉仕する

まず市川氏は、JETSの規約から、福音主義神学の目的を「教会の健全な成長と発展に奉仕すること」（規約第4条）とし、それをより包括的に言えば、宣教による神の国の進展・成就とする。「自分自身が福音を聞き、生かされ（救われ）、福音を聞く人々に同じことが起こり、彼らが共同体を形成し、社会に霊的感化を及ぼし、多くのキリスト者が諸領域に輩出し、福音がそれら諸領域にて結実し、こうして神の支配が及んでいくことが、福音自体の―復活のイエス・キリストご自身の―約束かつ要求で」あり、このように福音に生かされることが福音主義の本質であると述べる。

このような福音主義神学の目的と本質についての理解に、筆者は賛同し、今後もこれを継承すべきであると考えている。その一方で、日本の福音主義神学は、果たして、どれくらい日本の教会の健全な成長と発展に奉仕することができたのだろうかという問いが沸いてくる。

私自身はそれを十分に評価することはできないが、今日の日本の教会の厳しい状況を見るときに¹、福音主義神学研究のあり方を改めて見直すことが必要ではないかという思いがある。良いものはもちろん継承すべきであるが、しかし同時に抜本的に再考しなくてはならないこともあるのではないか。市川氏の基調講演には、このような教会との関係における福音主義神学への問題意識、危機意識はあまり見られないように思うが、どうであろうか。

¹ 参照 柴田初男『宣教の革新を求めて―データから見る日本の教会の現状と課題』（東京基督教大学国際宣教センター 2012年）

2 福音主義神学の基盤—健全な聖書観と健全な聖書神学

福音主義神学の基盤として挙げられているのは、聖書信仰（聖書の十全靈感）である（規約第3条）。市川氏が述べられたように、JETSはその設立時より、この聖書観の問題が、多くの議論を引き起こしてきた。この問題はもちろん福音主義神学の本質に属するものであり、聖書に対する理解と態度において大きなちがいをもたらす重要な問題である。

しかしながら福音主義神学の研究は、この聖書観の問題にあまりに注力し、その先にある、福音主義神学の実質的な基盤としての「聖書は全体として何を言っているのか」という聖書神学の研究が、これまで十分には取り組まれてこなかったのではないだろうか。市川氏が、JETSにとっての今後の不可避的課題として、「聖書使信の中心と射程の相関の理解—聖書の直接の目的と機能と、間接的、究極的目的・機能との異同・相関性（無謬性と無誤性の論争の適否を含めて）」を挙げているのも、この問題に関係しているのではないか（要旨だけなので、正確な理解は難しいが）。

これまで聖書神学が十分取り組まれてこなかった理由に、19-20世紀にかけて歴史的批評的研究の支配下にあった近代聖書学の影響も挙げることができよう。この研究方法の特徴の一つは、研究の焦点が、聖書テキストそれ自体というよりも、聖書テキストの背後にあるもの（伝承、生活の座など）におかれていた。その結果、「聖書は全体として何を語っているか」というような問いへの関心が失われる傾向にあった。さらに近年の聖書学の多くは、各分野における研究の専門化と相まって視野が狭くなり、聖書の多様性を過度に強調する傾向にあった。このような学問的状況の中では、聖書の統一性の主張は聖書の本性にそぐわないとみなされてきたのである。²

しかしこのような行き過ぎに対して、最近になり、見直しの動きが聖書学の内部において徐々に活発化してきている。その中の最も重要な動きが、「聖書プロジェクト」である。これは著名な聖書学者であるデューク大学のリチャード・ヘイズ教授を中心に、15名の第一線の研究者たち（その中には、世界的な聖書学者リチャード・ボウカム教授も含まれている）が4年間にわたって定期的な会合をもちつつ共同研究を行ったのである（1998年～2002年）。その目的は、「聖書を神学的に読む習慣を作り出し、範例を示し、この習慣を育成」することであった。そこから聖書の解釈についての九つの核心的主張を提示するにいたった。その中の最初の中心的主張が、聖書の統一性と一貫性の回復である。「聖書は、世界を創造し、裁き、救う、神の行動の物語を真実に語っている」（命題1）。「聖書は、一貫したドラマティックな語りとしての、教会の持つ信仰のルールの光のもとで、はじめて正しく理解される」（命題2）³

このような聖書学の新たな動きは歓迎すべきものであり、これからの福音主義神学は、

² リチャード・ボウカム「一貫した物語として聖書を読む」、エレン・デイヴィス、リチャード・ヘイズ編 芳賀力訳『聖書を読む技法—ポストモダンと聖書の復権』（新教出版社2007年）所収。

³ 詳しくは、同上書 22-29頁（「聖書の解釈をめぐる9つの命題」）。特にリチャード・ボウカムの同上論文を参照せよ。

聖書を全体として捉えようとする聖書神学と積極的な対話をしていくべきである。それは、福音主義神学の基盤を強固にするのみならず、福音主義の中核である「福音」の理解がより豊かになることで、福音主義神学そのものもより魅力的なものとなっていく可能性が大いにあるからである。

3 聖書神学と神の宣教の神学

そのような福音主義神学研究のあり方を示す一つのよい例として、クリストファー・ライトの研究がある。彼は、福音主義の陣営に立ちつつ、聖書神学と積極的に対話し、神の宣教の神学を展開している。

ライトによれば、聖書は基本的にわたしたちに物語を語る。それは、一つのレベルにおいては、歴史物語であり、また、他のレベルにおいては、それは大いなる物語 (a **grand metanarrative**) である。それは、

- ・ 目的をもって天地創造された神から始まり
- ・ この目的に人間が反逆することで起こってきたさまざまな葛藤や問題が語られ
- ・ 人間の歴史を舞台に繰り広げられる神の贖いの目的をもった物語をおもな内容として聖書は進んでいき
- ・ 歴史の地平の向こう側に新しい創造という終末的な希望を見ながら終わる

この大いなる物語は、創造、墮落、贖い、将来の希望という四つの焦点をもつ物語として提示されてきた。この世界観の前提にあるのは、ひとりの神が世界と人類の歴史の中で働かれ、その神はゴール、目的、使命 (**mission**) をもっていて、それらは、神の言葉の力によって、また御名の栄光のために、必ず成就されるのである。これが神の宣教 (**the mission of God**) である。

しかしながらこれは、ポストモダン主義者が批判するような、支流のない川のように一つの方向にだけ流れる、単一の物語ではない。いろいろな小さな物語が複雑に混ざり合った豊かな物語である。しかし、その流れには、上述したような明確な方向性があるのである。⁴

以上のような議論からもわかるように、クリストファー・ライトは、聖書神学の最新の成果と注意深く対話を続けることで、宣教に対する理解を広げ、深めていっている。「神の宣教は、神の被造物全体のために、神の民が神の世界と関わる中で、神の民を通して行われるのだ。」⁵ライトは、これまでのような、魂の救いだけではなく、「伝道と社会的責任」という枠組みをも超え、⁶ 聖書全体のストーリーに基づいた、よりホーリスティックな宣

⁴ Christopher J. H. Wright *The Mission of God: Unlocking the Bible's Grand Narrative* (IVP, 2007), 61-62. 『神の宣教—聖書の壮大な物語を読み解く 第1巻』(東京ミッション研究所 2012年) 66-67頁。Cf. Richard Bauckham *Bible and Mission: Christian Witness in a Postmodern World* (Paternoster Press, 2003), 83-94.

⁵ 同上書 14頁。

⁶ ジョン・ストット『地の塩 世の光：キリスト教社会倫理序説』(すぐ書房 1986年) 第

教の神学を展開しているのである。

結び

最初に述べたように、福音主義神学の目的は、教会の健全な成長と発展に仕えることである。そのために今必要なのは、福音主義神学の中核である宣教の神学をより豊かで魅力あるものとすることである。⁷そのためには、福音主義神学の基盤である聖書信仰の確立とともに、聖書神学との積極的な対話が必要である。そこからより聖書的でホーリスティックな宣教の神学が生み出されていくからである。さらに、それを日本の教会に適用していくにあたっては、すでに日本の中でホーリスティックな取り組みをしてきた賀川豊彦の実践⁸や、ポスト・3・11（東日本大震災後）の教会の実践等に、神学的な考察を加えることは有益であろう。

1 章。

⁷ アリスター・マグラス 『キリスト教の将来と福音主義』（いのちのことば社 1995年）141-146頁。223-234頁。

⁸ 賀川豊彦『友愛の政治経済学』（日本生活協同組合連合会出版部 2009年）。